

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13293

研究課題名(和文) エジプトのナショナリズムにおける民族概念と宗教的アイデンティティ

研究課題名(英文) Ethnicity and Religious Identity in Egyptian Nationalism

研究代表者

三代川 寛子 (Miyokawa, Hiroko)

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師

研究者番号：90614032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：エジプトの宗教的マイノリティであるコプト正教徒が持つ、コプト正教徒としての宗教的アイデンティティとエジプト人としての民族的アイデンティティの関係を検討した。それにより、コプト正教徒(特に世俗的知識人)の間では、両者が結びついていると主張・認識されていることが明らかになった。この事例研究により、エジプトにおける宗教集団間の共存、およびコプト正教徒のエジプト国民としての統合を支える要因を思想面から明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エジプトの宗教的マイノリティであるコプト正教徒の歴史認識や聖人崇敬のあり方を分析することにより、彼らの宗教的アイデンティティが民族的アイデンティティ(すなわちエジプト人であるという意識)と結びついていることを示した。これにより、あるマイノリティ集団がマジョリティとは異なる独自の集団意識を持っていても、その国家への帰属意識が薄まるわけではなく、むしろマジョリティとは異なる観点からその国家との結びつきを構築している場合があることを具体例をもって示すことができた。

研究成果の概要(英文)：I analyzed relations between Egyptian nationalism and Coptic religious identity based on a couple of case studies. As one of the case studies, I analyzed the revival of St. Menas veneration in the middle of the twentieth century. I also analyzed the historical view expressed in the book entitled *Tarikh al-Umma al-Qibtiya* published in the late nineteenth century. In addition, I wrote several articles about religious practices of the contemporary Coptic Orthodox Christians.

研究分野：エジプト近代史

キーワード：コプト正教徒 エジプト 近代史 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

エジプトの国民統合イデオロギーに関しては、宗教的帰属を度外視し、非ムスリムもエジプト国民として平等に扱うべきであるとするリベラリズムを支持する立場と、イスラームをエジプトのナショナル・アイデンティティの中核に位置付けるべきであるとする立場が二大勢力となっている。そのため、エジプトという国民国家におけるイスラームの位置づけが議論されると、2012年のエジプト憲法改正の例に見られるように、国を二分するイデオロギー論争に発展する。このように、エジプトにナショナル・アイデンティティおよび統合イデオロギーが複数存在し、それらが競合している状況の中で、エジプト土着のキリスト教徒であるコプト正教徒の位置づけは揺らいできたと言える。また、特に2010年代以降、一部のイスラーム主義者によるコプト正教徒に対するヘイト・スピーチや教会への自爆テロなども発生しており、両者の間の緊張関係が高まっている状況がある。

2. 研究の目的

上述のような状況を受けて、コプト正教徒の間で共有されるエジプト人としての帰属意識とコプト正教徒としての帰属意識の関係を検討し、エジプトにおける宗教的マイノリティの統合の状況を明らかにすることが本研究の目的である。本研究プロジェクトの前に行っていた研究では、国民国家建設期に相当する19世紀末から20世紀前半の時期に焦点を当てたが、本研究では対象とする時期を拡大して、より現代に近い時期も扱うことにした。それにより、現代のエジプト社会における宗派間関係により直接的にアプローチすることができるだろうし、現代エジプトにおける複数のナショナル・アイデンティティと統合イデオロギーの関係をコプト正教徒の目線から分析することができるだろう。

3. 研究の方法

以下の3つの事例からこの問題を検討する。研究方法は文献研究である。

(1) コプト語教育

コプト語とは古代のエジプト語の発展段階の最終段階にあたる言語であり、古代末期においては、エジプトで使用される主要な言語であった。現在、コプト語を母語とする者はほぼ皆無と考えられているが(20世紀初頭に復興運動を担った一族は例外)、コプト正教会で典礼や聖歌の言語として使われ続けている。

現在、エジプトでコプト語教育が行われている主要な場は、コプト正教会が運営するコプト学研究所(Institute of Coptic Studies)、コプト神学校、各教会の助祭向け勉強会などであり、それ以外では、エジプトの主要大学の考古学学科あるいは東洋言語学科である。

コプト語が聖なる宗教語として教えられている場と古代語として教えられている場でのコプト語の捉え方を比較調査し、その関係を明らかにする。これらの宗教組織および学術機関におけるコプト語教育史・研究史を振り返ることでコプト語の宗教語/民族語としての性格の重なり合いを浮き彫りにする。

(2) エジプトのナショナル・ヒストリーにおける「コプト期」の扱い

「コプト期」とは、概ね1世紀ごろのアレクサンドリア教会の成立からアラブ・イスラーム軍のエジプト征服(639~642年ごろ)までの時期を指す語とされているが、そもそも「コプト期」という呼称自体が学術的な時代区分ではなく、一つの歴史観を示していると考えられている。そのため、まずはエジプトにおける「コプト期」の歴史研究史を追い、エジプトの学術界で「コプト期」という呼称がいつ頃から使用されるようになり、そしてそれがどのように扱われてきたか明らかにする。次に、エジプトの歴史教科書における「コプト期」の扱い方を明らかにした上で、「コプト期」がエジプトのナショナル・ヒストリーの中でどのように議論されてきたのかを文献資料を基に明らかにする。

(3) コプト正教会を「エジプトの民族教会」と捉える歴史観

エジプトのナショナル・ヒストリーの語りの中で、コプト正教会はエジプトに根差した教会として捉えられており、古くはローマ帝国から近代の西洋列強に至るまで、常に外来の勢力に対抗し、祖国であるエジプトに忠実であり続けてきた存在として描かれる傾向にある。その中で、アラブ・イスラーム軍のエジプト征服やナポレオンのエジプト遠征、1919年革命などの歴史的な節目に注目し、コプト正教会が果たしたとされる役割に関する言説の内容を明らかにする。さらに、こうした「エジプトの民族教会」史観は、現在ではコプト正教徒の信徒共同体の枠を超えて一定程度エジプト社会で共有されているが、これが共有されていった背景とその影響を明らかにする。

4. 研究成果

(1) コプト語教育

コプト語教育については、研究計画では採用年度4年目(2020年度)に取り組む予定だったが、その頃新型コロナウイルスの感染拡大が起きたため、エジプトへの渡航が困難になり、十分な調査を行うことができなかった。

しかし、2021年にはエジプトにおけるアラビア語教育とナショナリズムに関する書籍(平寛多朗『エジプトの「国語教育」 アラブ人の歴史とアラビア語文学史』風響社、2021年)が刊行されており、本研究と関連の深い業績が近年蓄積されつつある。そのため、今後は「エジプトにおける言語教育とナショナリズム」というより広い枠組みで、コプト語に軸足を置きつつ、アラビア語とナショナリズムという比較対象を考慮に入れつつ研究を進展させていきたいと考えている。

(2) エジプトのナショナル・ヒストリーにおける「コプト期」の扱い

採用年度3年目(2019年度)に重点的にこの課題に取り組んだ。エジプトの国史の中でコプトの歴史がどのように位置づけられたのかという点に焦点をあてて研究発表を行った。

まず、現在使用されているエジプトの歴史教科書では、「コプト期(al-hiqba al-qibtīya)」とは1世紀後半の聖マルコによるキリスト教布教から7世紀前半のイスラーム到来までをカバーする時代であるが、この時代区分および呼称がいつ頃から現れてきたのかという点を調査した。その結果、1920年代~30年代頃であることが推測される状況証拠は見つかったが、資料収集が思うように進まず、2019年度中の調査ではこの説を支持するより確かな証拠は見つからなかった。資料収集が思うように進まなかったため、研究成果を論文にまとめて発表することはできなかったが、少なくとも国際学会での研究発表を通して問題提起をすることができた(Hiroko Miyokawa, "Inventing the Coptic Period in the Nationalist History of Egypt," Middle East Studies Association Annual Meeting, New Orleans LA USA, 2019.)

また、本調査を通して、19世紀末から20世紀最初の数十年間には、コプトの歴史家らが複数の歴史書を著しており、そこでの時代の区切り方はさまざまであること、そしてエジプトにおけるキリスト教布教以前の時代の扱いも多様であることが明らかになった。また、19世紀以前のコプトの歴史叙述はもとより、同時代のムスリムのエジプト人による歴史叙述、ヨーロッパ人の歴史叙述などからも影響を受けていることから、今後さらに広範な史料を精査する必要がある。また、歴史の叙述そのもののみならず、政治社会情勢も考慮に入れる必要があり、1922年のエジプト独立以後の経済のエジプト化と、それに伴うコプト富裕層のエジプト社会における影響力の高まり、教育制度の整備・拡充など多くの論点との関連を議論する必要がある。今後これらの論点を考慮に入れた上で、『オリエント』などの学術誌に投稿論文として発表する予定である。

(3) コプト正教会を「エジプトの民族教会」と捉える歴史観

19世紀以前、コプト正教徒の共同体の歴史はコプト正教会の歴史として書かれる傾向が強かった。そうした教会史の中では、福音記者マルコによるエジプト布教とアレクサンドリア教会の設立が非常に重視されてきたのであるが、本研究で焦点を当てた『コプト共同体の歴史』では、それ以前の古代文明の時代から歴史が書き起こされており、エジプトにキリスト教がもたらされたことは非常に簡単に言及されているに過ぎない。他にも、同書にはコプトの歴史を「教会の歴史」から脱皮させようと試みた痕跡が見られ、コプトのエジプト人意識の形成過程を探る上で重要な資料となっている。

本研究については、研究成果を書籍の章(Hiroko Miyokawa, "Ya'qub Nakhla Rūfayla", "Tārīkh al-Umma al-Qibṭīya", David Thomas and John A. Chesworth (eds.) *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History*. Volume 18. The Ottoman Empire (1800-1914), Leiden: Brill, pp. 604-612, 2021)として発表した。また、国際的な学会で研究発表(Hiroko Miyokawa, "Coptic Historiographies in Colonial Egypt," *Copts in Modernity*, St Athanasius College, Melbourne, Australia, 2018.)を行った。

当初の予定に加えて、第二次大戦中のアラメインの戦いにおいて、イギリス兵と共に対ドイツ戦を戦っていたギリシア人兵士の前に聖メナスという聖人が現れてドイツ兵を退散させたという奇蹟譚が出回ったこと、そしてそれを受けてエジプト人のコプト正教徒の間で聖メナスの崇敬が盛んになったことを指摘する研究発表を行った(Hiroko Miyokawa, "The Discovery of the Pilgrim City of Abu Mena and the Revival of St Menas Veneration", 5th World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES), Seville, Spain, 2018 および Hiroko Miyokawa "Coptic Identity in Decolonizing Alexandria and the Egyptianization of St. Menas," Middle East Studies Association Annual Meeting, Online, 2020)。戦場となったアラメインの近くにある聖メナスの巡礼遺跡(後に世界遺産に登録されている)から柱を移動し、教会の祭壇の支柱にするなど、コプト正教徒の間で聖メナスをエジプト出身のエジプトの聖人と位置づけ、その大半がギリシア正教徒であるギリシア人から取り返す動きが見られたことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 5
2. 論文標題 「コプト正教会における祭りと断食」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 赤堀雅幸(編)『中東に生きる宗教的少数派の人々 その暮らしと祭り』上智大学イスラーム研究センター、SIAS Lectures	6. 最初と最後の頁 31-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 24
2. 論文標題 「『もうひとつの世界』を生きる 現代エジプトの修道制と修道者たち」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『総合文化研究 (Trans-Cultural Studies) 』	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/99751	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 23
2. 論文標題 「聖家族のエジプト逃避行 形ある伝説」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『総合文化研究 (Trans-Cultural Studies) 』	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/94354	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 716
2. 論文標題 「コプト正教会の近現代史」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『歴史と地理』	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 22
2. 論文標題 「聞こえる音、聞こえない音 コプト正教会の音風景についての一考察」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『総合文化研究 (Trans-Cultural Studies) 』	6. 最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92872	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 22
2. 論文標題 「総合文化研究所ワークショップ 二十世紀初頭におけるコプト・キリスト教徒の文化ナショナリズム」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『総合文化研究 (Trans-Cultural Studies) 』	6. 最初と最後の頁 156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92881	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三代川寛子	4. 巻 11
2. 論文標題 「<書評>辻明日香 『コプト聖人伝にみる十四世紀エジプト社会』 (山川歴史モノグラフ32) 山川出版社 2016年 196 + 63頁」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『イスラーム世界研究』	6. 最初と最後の頁 407 - 410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/230473	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件(うち招待講演 6件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 三代川寛子
2. 発表標題 20世紀半ばのコプト正教会における聖メナス崇敬の復興
3. 学会等名 日本オリエント学会第62 回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三代川寛子
2. 発表標題 Coptic Identity in Decolonizing Alexandria and the Egyptianization of St. Menas
3. 学会等名 Middle East Studies Association of North America Annual Meeting 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 Inventing the Coptic Period in the Nationalist History of Egypt.
3. 学会等名 Middle East Studies Association of North America Annual Meeting 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三代川寛子
2. 発表標題 20世紀初頭におけるコプト・キリスト教徒の文化ナショナリズム
3. 学会等名 総合文化研究所ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 Coptic Historiographies in Colonial Egypt
3. 学会等名 Symposium Copts in Modernity (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 The Discovery of the Pilgrim City of Abu Mena and the Revival of St Menas Veneration
3. 学会等名 5th World Congress for Middle Eastern Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 Coptic Studies Between "Copticity" and Egyptianness
3. 学会等名 Middle East Studies Association of North America (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三代川寛子
2. 発表標題 コプト・キリスト教徒の一年 断食と祭礼
3. 学会等名 中東に生きる宗教的少数派の人々 その暮らしと祭り (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "The Copts and Nation-Building in Modern Egypt"
3. 学会等名 Association for the Study of Nationalities 22nd World Convention (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "Sectarianism and Nationalism: Coptic Cultural Revival in Colonial Egypt"
3. 学会等名 Eastern Christianity and Islam Lecture Seminar Series (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "Copticness, Egyptianess, and Arabness in Modern Coptic Historiography"
3. 学会等名 Oxford-Cambridge Middle East History Graduate and Early Career Researchers' Work-in-progress Workshop
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三代川寛子
2. 発表標題 「コプト・キリスト教徒の文化ナショナリズム：エジプトのナイルズ祭を事例に」
3. 学会等名 日本学術振興会カイロ研究連絡センター 2017年度第3回定例懇話会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "Id al-Nayruz al-Misri: Nashat-hu, al-Ihtifal bih, wa lhya'-hu"
3. 学会等名 Societe d'Archaeologie Copte Seminar series (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "The Rediscovery of St. Menas the Miracle Maker"
3. 学会等名 "In partibus fidelium". Missions du Levant et connaissance de l' Orient chretien (XIXe-XXIe siecles)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "Coptic Historiography in Colonial Egypt: From the History of Patriarchs to the History of Coptic Nation"
3. 学会等名 Rethinking Nationalism, Sectarianism and EthnoReligious Mobilisation in the Middle East
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "The Coptic Church and the revival of veneration of St Menas in Egypt"
3. 学会等名 Eastern Christianity Historical, Theological, & Cultural Heritage Lecture Seminar Series (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Miyokawa
2. 発表標題 "The Emergence of Coptic Modern Historiography: The Case of 'The History of the Coptic Nation'"
3. 学会等名 Modern Coptic Studies: A Symposium (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Hiroko Miyokawa,	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 604-612
3. 書名 "Ya'qub Nakhla Rufayla", "Tarikh al-Umma al-Qibtiya", in David Thomas and John A. Chesworth (eds.) Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History. Volume 18. The Ottoman Empire (1800-1914),	
1. 著者名 Hiroko Miyokawa	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Rowman & Littlefield	5. 総ページ数 660
3. 書名 "Christianity and European Colonial Rule" in Mitri Raheb and Mark A. Lamport (eds.), Handbook of Christianity in the Middle East,	
1. 著者名 三代川寛子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 775
3. 書名 「【コラム】民族主義と歴史意識」「エジプトの定番メニューと伝統料理」「コプトの食習慣と食文化」 「エジプトのパン(エイシュ)事情」鈴木重、近藤二郎、赤堀雅幸(編)『中東・オリエント文化事典』	
1. 著者名 三代川寛子、戸田聡、小林稔、貝原哲生、辻明日香、松田俊道、岩崎真紀、石川博樹、石原美奈子、三宅理一、高橋英海、武藤慎一、太田敬子、佐藤紀子、飯野りさ、三尾真琴、菅瀬晶子、中村妙子、吉村貴之、浜田華練、藤田康仁、井上浩一、草部久嗣、アガスティン・サリ、ヴェリヤト・シリル、豊田浩志、関哲行(部分担当)、三代川寛子(編)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 608
3. 書名 東方キリスト教諸教会	

1. 著者名 高橋圭、三代川寛子、岩坂将充、金谷美紗、私市正年、白谷望、関佳奈子、高岡豊、登利谷正人、中村遥、野口舞子、堀場明子、溝渕正季、渡邊祥子（部分担当）、高岡豊、白谷望、溝渕正季（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 240
3. 書名 中東・イスラーム世界の歴史・宗教・政治	

1. 著者名 Hiroko Miyokawa, Nelly van Doorn-Harder, Sebastian Elsasser, Mariz Tadros, Angie Heo, Gaetan du Roy, Severine Gabry-Thienpont, Carolyn M. Ramzy, Ghada Botros, Rachel Loewen, Nora Stene, Frederick M. Denny, Maged S. A. Mikhail, Caroline T. Schroeder, Karel C. Innemee (contributors), Nelly van Doorn-Harder (ed)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 The University of South Carolina Press	5. 総ページ数 296
3. 書名 Copts in Context Negotiating Identity, Tradition, and Modernity	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------